

映画の創出とルイ・リュミエール〈その1〉

—シネマトグラフの発明から学術的な集会での公開まで—

(1894年12月~1895年11月)

永治 日出雄

Hideo NAGAYA

(ヨーロッパ文化選修)

1890年代に誕生した映画は、20世紀の重要な伝達手段や文化領域として確立し、電子工学の発達、衛星放送の開始などいわゆる新映像時代を迎えて、さらに新たな局面で発展しつつある。こうした伝達手段の開発に関してシネマトグラフを発明したリュミエール一家 (Les LUMIERES) の功績は、多くの映画史家から最大級の評価を受けてきた。映画創出の契機としてはマレの写真銃、レノーによる視覚劇場、エディソンのキネストコープ、メリエスによる演出スタジオなども重要であり、リュミエールだけを映画の創始者とみなす見解には異論も寄せられる。とはいえ、パリ・キャブシーヌ大通りのグラン・カフェにおけるシネマトグラフの一般公開が、新しい文化領域の確立に向けて際立った社会的反響と歴史的意義を勝ち得たことは否定できない。⁽¹⁾

1895年12月28日から始まるグラン・カフェでの一般公開は、周到な準備と企画のもとに行なわれた。しかし、リュミエール一家はすでに同年3月より学術研究者や写真専門家にシネマトグラフを公開し、当代の傑出した学者から称賛を受けていた。本稿の課題はリュミエール一家による映画創出の経緯と意義、ならびにシネマトグラフの世界的な普及を追究するところにあるが、まず初回にはキャブシーヌ大通りでこの興行に先立つ披露、すなわち学術的・専門的な集会における公開について考察したい。

I シネマトグラフの発明と特許取得

リュミエール家の兄弟オーギュストとルイ (August LUMIERE 1862-1954 および Louis LUMIERE 1864-1948) がシネマトグラフを考案し、特許を申請したのは1894年から1895年にかけての冬である。父アントワーヌ・リュミエール (Antoine LUMIERE) は1871年よりリヨンで写真館を営んだが、やがて臭化銀ゼラチンの改良、乾板感光材の開発によって企業家としての成功を手中にした。リヨン郊外に彼が建設したモンプレジール工場は、男女300人の従業員を擁し、年間1500万箇の乾板を生産した。それはヨーロッパにおける最初の写真材料産業であり、イーストマン・コダック会社の抬頭までそうした業種における最大の企業でもあった。⁽²⁾

1894年からアントワーヌはモンプレジール工場の経営をふたりの息子に任せ、地中海沿岸ラ・シオタに隠遁した。オーギュストとルイはともにマルチニエール工業専門学校を卒業し、とくに後者は若くして臭化銀ゼラチンの改良を為し遂げ、父親の片腕となっていた。

同じくルイによってシネマトグラフの着想がなされたのは、1894年12月、厳密にはクリスマスの日であったという。⁽³⁾フランス軍部の軍法会議がドレフュス大尉に終身禁固の判決を下した直後にあたる。映画史研究の権威サドゥールは1946年と1948年にルイ・リュミエールへのインタビューを実現した。この対談において84歳のルイはシネマトグラフ発明の端緒をつぎのように回想している。

〔ルイ・リュミエールに対する最後のインタビュー 1948年1月6日〕

サドゥール : ルイ・リュミエールさん。どのような状況のもとであなたは活動写真に関心を持ち始めたのですか。

ルイ・リュミエール : 1894年の夏に兄オーギュストと私が研究を開始しました。この時点までにマレ、エディソン、ドゥメニの研究が一定の成果を挙げましたが、フィルムをスクリーンに映写することは行なわれなかったのです。そのとき解決すべき主要な課題は、帯状のフィルムが順次に繰り出される装置を見出すことでした。兄オーギュストは半円形のシリンダー（同じような器械にレオン・ブーリが備えようとした類のもの）を用いようと考えました。しかし、そうした装置は荒過ぎたのです。作動することもできず、作動の見込みもありませんでした。〔中略〕

サドゥール : それではあなたが提起された繰り出し装置はどのようなものだったのですか。

ルイ・リュミエール : その頃私はすこし身体の具合が悪く、床を離れずにいたのです。ある夜眠れないでいると、解決の方法が突然念頭に閃きました。ミシンの繰り出し装置で〈布押え〉と呼ばれる仕組みを撮影の過程に採り入れればよいのです。そのような仕組みを私はまず円形の偏心体で造り、まもなく三角形の偏心体に替えました。これこそ種々の用途に用いられ、〈ホルンブローア-偏心輪〉の名で知られるものです。⁽⁴⁾

こうした撮影・映写装置の着想がまずルイによってなされたことは、兄オーギュストも認めており、リュミエール工場の主任機械技師モワッソンの証言とも一致する。とはいえ、この兄弟は仕事や研究についてつねに協力し、シネマトグラフの特許申請も両者の連名で提出された。こうして1895年2月13日フランス第三共和国の特許証書がリュミエール兄弟に交付され、新しい映写機械の発明が公に認められた。これに同年3月30日追加証書が付され、その時点でシネマトグラフという名称が定められている。⁽⁵⁾

特 許 証 書 (15年間有効)

第245032号

特許局 (フランス人・外国人のため1886年創設)

リヨン, サックス大通り66番地 (モラン遊歩道)

担当技官: レピネットならびにラビルー

〈分解写真のプリントを作り、かつ見せるための器械〉

申請者: アウグスト・リュミエールおよびルイ・リュミエール

【 明 細 書 】

よく知られているように、分解写真のプリントの場合には、動く事象や人物を撮した一連の写真を、僅かな間隔を挟みつつ連続的に視覚させることにより、運動の幻影を見る人に感じさせる。

申請者の発明はこうした分解写真のプリントを作り、かつ見せるための新しい器械

である。

整然と穿孔したテープに間歇的な作用を与えること、すなわちプリントを作る場合にも、見せる場合にも、停止の瞬間を挟みつつ、こうしたテープに連続的な移動を刻みつけることを、この器械の装置は本質的な特性としている。[中略]

この器械またはほかの特殊な器械によって、上述の装置はつぎの用途に使用できる。

- ①さまざまな光景を写し取るよう、直接の露出によりネガ・陰画を作るため。
- ②ポジ・陽画を焼付けるため。
- ③これら運動する写真を直接に見るか、スクリーンのうえに映写するため。⁽⁶⁾

II 国立工業奨励協会における公開

シネマトグラフが初めて公開されたのは、1895年3月22日国立工業奨励協会の本部においてである。1802年執政ナポレオンのもとで結成されたこの団体は、フランスにおける技術・産業の振興を目的とし、さまざまな分野の科学者、技術者、企業家によって構成されている。当時の会長マスカールは気象電気や地球磁気などの研究で国際的な名声を博し、学界で最高の地位とされる科学アカデミー院長でもあった。長い伝統を誇る国立工業奨励協会には資本、機械、化学などほか、建築、美術についても専門的な委員会が設けられ、そこには写真家の代表ダバンヌも選ばれていた。なお、乾板感光材を開発し、写真材料の工場を経営するアントワヌ・リュミエールもつとにこの協会に加入している。⁽⁷⁾

国立工業奨励協会本部の建物はカルチェ・ラタンの要地のひとつ、サン・ジェルマン・デ・プレ広場＝レンヌ街4番地（当時の表記はレンヌ街44番地）に現在も見出される。この本部の真向いではロマネスク様式の端正なサン・ジェルマン・デ・プレ教会が11世紀以来パリの市街を見守り、隣接する右手の建物では高名なカフェ・ドゥー・マゴーが昼夜賑わっている。⁽⁸⁾ 20世紀のさまざまな知識人と係りを結ぶこのカフェは、1885年からその地で開店し、すでにヴェルヌ、ランボー、マラルメが顧客となっていた。

リュミエール一家による映写器械の公開は国立工業奨励協会の3月例会に組み込まれ、カルチェ・ラタンの会場に約200人の会衆が参集した。シネマトグラフの卓越した性能とともに、企業家アントワヌの実績や信用が会員の期待を高めたと思われる。

例会は20時半から会長マスカールの主宰で進められ、会務報告に続いて次男ルイ・リュミエールによる講演とスクリーンへの映写が行われた。この講演と映写は熱烈な拍手で再三中断され、ルイの発表が終ると、会衆を代表してマスカールがリュミエール一家を祝福する。会長自身も太陽スペクトルの研究において写真探知を活用し、撮影・映写には強い関心を持っていた。国立工業奨励協会の『会報』に収められた当日の集会要録は、シネマトグラフ初公開を伝える主催団体の記録としてきわめて重要な史料である。⁽⁹⁾本稿ではその全文を別に掲げるとともに、主要な部分を以下訳出する。

〔国立工業奨励協会会誌 第10巻第4号（1895年4月）〕

集 会 要 録

1895年3月22日の集会

議長：マスカール会長

開会：8時半

前回の議事録が朗読され、承認された。

まず、つぎの4月の例会について12日が聖金曜日にあたるため、5日に開催することが、会長より告知された。[中略（会務に関する報告）]

講演：L・リュミエール氏が〈写真工業〉および〈リップマン氏のカラー写真〉について講演を行った。この講演はきわめて注目すべきプリントの映写と未発表の〈映写キネトスコープ〉の披露を伴って、熱烈な関心を喚起し、聴衆の拍手によって再三中断された。本会誌は氏の講演全体を収録する予定である。

会衆を代表して会長はリュミエール氏の美事な講演に謝意を述べた。本協会がとくに目的とするのは、わが国におけるさまざまな分野の工業を奨励することである。このような趣旨に照らして会長は、リュミエール氏とふたりの子息を祝福し、数年来彼らが際立って重要な新しい製作を創出・発展させたこと、彼らの製品が国際的なあらゆる展示会で栄冠に輝き、わが国の工業に最大の名誉をもたらしたことを讃えた。

リップマン氏の美事な業績もフランス科学の名声を高める。氏の発明に感嘆の意を表すため、奨励協会はダゲール、ニエプス両氏の場合と同じく、最高の褒賞を授けることを会長が欣然として表明された。⁽¹⁰⁾

この時期に会員の間で評判となったのはリップマンが発明したカラー写真であり、国立工業奨励協会は同年の協会大賞と賞金1万2千フランを彼に授与した。⁽¹¹⁾ カラー写真と同じくシネマトグラフが写真の新しい発展と当初みなされたことは確かである。ルイ・リュミエールはサン・ジェルマン・デ・プレ広場における講演の一部をリップマンの業績にあてたが、彼自身も1904年にオートクロームのカラー印画を創案し、写真史の一節を飾るにいたる。⁽¹²⁾

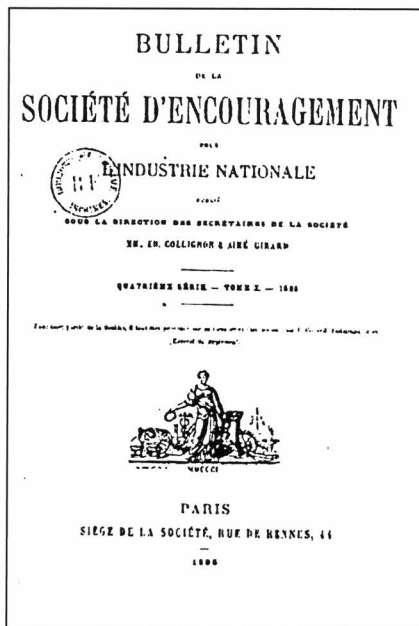
国立工業奨励協会におけるシネマトグラフ公開については、ふたつの定期刊行物、『パリ写真クラブ会報』第3号および『写真指導員』第9号に報告が見出される。オセジェの執筆による『クラブ会報』は当日上映された作品『工場の出口』をつぎのように説明する。

[リュミエール氏は] リヨンにある彼らの工場の出口をまずスクリーンに投射した。開かれたままでだれもいない。ついで突然ひとりの人物が姿を見せ、右の方に去っていく。これに続くもうひとり左の方に進む。人影は二つになり、三つになり、ついには群れをなした男女の労働者がやって来る。これら退出する人々はまず徒歩で現れ、ついで自転車や車や馬で現われる。そこで私たちは眩く、100人もの生きた人物・集団が、スクリーンに投射された出口を50秒で通り過ぎた、と。⁽¹³⁾

こうした記録のなかでとくに興味を惹くのは、映画人アリス・ギイの証言である。この集会にはコントロール写真会社の青年社長ゴーモンも招かれ、当時秘書であった彼女が同伴した。のちにゴーモンは経営者としてフランス映画界に君臨し、彼のもとでギイも史上初の女性監督に成長する。彼女の著作『映画を開拓したひとりの女性の自伝』にはつぎのような回想が含まれる。⁽¹⁴⁾

その頃ゴーモンを年来の友人ふたりが訪れました。アウグスト・リュミエールとルイ・リュミエールです。国立工業奨励協会の一夕に出席するよう、ふたりの兄弟はゴーモンを招待しました。みづから発明した新しい器械をそこで披露するつもりだ、と彼らは語るのです。この話し合いに私も立会い、ゴーモンと同じようにふたりから招待

シネマトグラフの初公開を記録した
『国立工業奨励協会会誌』1895年4月号



	Acide		
	azote.	phosphorique.	Potasse.
Vins blancs du Midi.	0,129	0,157	0,847
— de la Bourgogne.	0,509	0,186	0,677
— de Saumur.	0,263	0,317	0,890
— de la Champagne.	0,233	0,188	0,612

La qualité supérieure coïncide donc avec une plus grande teneur en matières azotées et en phosphates; celle-ci n'est peut-être pas sans influence sur quelques-unes des propriétés organoleptiques qui établissent de si grandes différences de prix entre les vins. »

PROCES-VERBAUX

Séance du 22 mars 1895.

Présidence de M. Mascart, président.

La séance est ouverte à huit heures et demie.

Le procès-verbal de la dernière séance est lu et adopté.

M. le Président annonce que le Conseil se réunira en séance le 5 avril, pour remplacer la séance réglementaire du 12, qui tombe le Vendredi-Saint.

DÉFOUILLEMENT DE LA CORRESPONDANCE. — MM. les Secrétaires défontillent la correspondance.

Faire part de la mort de M. C. Pompon-Lelamille, membre de la Société, décédé à Paris à l'âge de 53 ans, membre de la Chambre syndicale des produits chimiques.

M. Maxime Hocquet, 15, rue Brézin, Paris, inventeur d'un aggloméré de liège flexible ou rigide à volonté. Demande une annuité de brevet. (Arts mécaniques.)

M. Delaurier, 77, rue Daguerre.

Mémoire sur deux nouveaux types de piles. (Arts économiques.)

Mémoire sur le principe du monocycle à balancier et son application à un nouveau type de broquette. (Arts mécaniques.)

M. Arbel, des forges de Courzon, remercie la Société de sa nomination comme membre.

M. Tellier remercie la Société de l'allocation qui lui a été accordée.

NOMINATIONS AU TITRE DE MEMBRES DE LA SOCIÉTÉ. — Sont élus membres de la Société :

M. Holtzer, maître de forges, présenté par M. Brunstein;

M. Mayer, fabricant d'outils, présenté par M. Simon;

M. Weisberger, ingénieur en chef des ponts et chaussées, présenté par MM. Mascart et Lambert.

M. le Président annonce que, sur la proposition du Comité des Arts écono-

miques, le Bureau a proposé, en mémoire du prix fondé par ce savant, de souscrire pour une somme de 500 francs à l'édition des œuvres de Melsens. Cette proposition, mise aux voix, est adoptée.

Il donne connaissance de deux lettres adressées au Président de la Société :

1° Une dépêche de M. le Ministre de la Marine annonçant qu'il a prescrit, dans son département, l'adoption du *Système de flotages* et de la *Jauge décimale métrique* proposés par la Société d'Encouragement, et félicitant la Société de l'initiative avec laquelle elle a provoqué cette unification, des plus utiles à l'industrie (1). M. le Président renouvelle à M. le Ministre de la Marine les remerciements de la Société, qu'il lui a déjà adressés par une lettre en réponse à sa dépêche.

2° Une lettre de Lord Brassey, président de l'*Institution of Naval Architects* de Londres, remerciant la Société d'Encouragement d'avoir mis ses locaux à sa disposition pendant le séjour que l'*Institution* se propose de faire à Paris cet été.

CONFÉRENCE. — M. L. Lumière fait une conférence sur l'*industrie de la photographie* et la *photographie des couleurs* de M. Lippmann.

Cette conférence, accompagnée de projections, d'épreuves extrêmement remarquables, et de l'exposition d'un *kinétoscope de projections* encore inédit, a excité le plus vif intérêt, et été souvent interrompue par les applaudissements de l'auditoire : elle sera reproduite *in extenso* dans le *Bulletin*.

M. le Président, s'associant aux manifestations de l'assemblée, remercie M. Lumière de sa belle conférence. La Société a surtout pour objet de suivre et d'encourager les différentes branches de l'industrie nationale. C'est à ce titre que M. le Président félicite M. Lumière père et ses deux fils d'avoir su, en quelques années, créer et développer une fabrication nouvelle, d'une importance exceptionnelle, et dont les produits, primés à toutes les expositions internationales, font le plus grand honneur à l'industrie de notre pays.

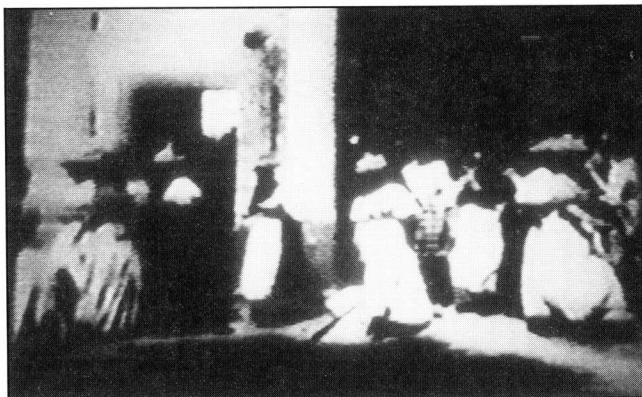
Quant aux beaux travaux de M. Lippmann, ils honorent la science française : M. le Président est heureux de pouvoir annoncer que la Société d'Encouragement témoignera bientôt à M. Lippmann l'admiration qu'elle éprouve pour ses découvertes en lui décernant, comme elle l'a fait pour Nièpce et pour Daguerre, sa plus haute récompense.

Séance du 5 avril 1895.

Présidence de M. Mascart, Président.

Le procès-verbal de la précédente séance est adopté.

(1) Bulletin de mars, p. 314.

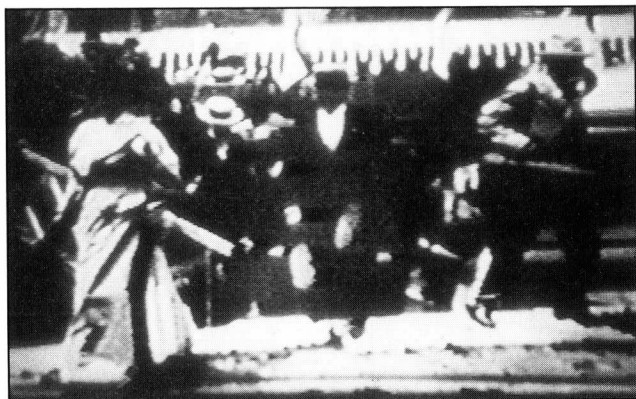


A. リュミエール製作『工場の出口』No.2
(1895年7月?)

この頁の写真AおよびCは現存するフィルムから直接に撮影し、写真Bはつぎの研究書より転写した。SADOUL, *Lumière et Méliès*, Paris, 1985. p. 20.



B. リュミエール製作『工場の出口』No.1
(1895年3月?部分的に写真のみ現存)
この場面が『工場の出口』No.2には含まれていない。



C. リュミエール製作
『大会小旅行参加者のソヌ河岸ヌヴェル到着』
(1895年6月)

を受けました。ただし、彼らは新しい器械をより詳しく説明するのを拒みました。彼らは言いました。「実際にご覧なさい。驚くべき器械ですよ。」

こうして好奇心を喚起され、私たちはその集会を見逃さぬよう用心しました。

私たちが到着すると、会堂の一方の壁に白い布が張り広げられ、他方の隅でリュミエール兄弟のひとりが、幻燈機に似た器械を操作していました。室内が暗くなったあと、こうした仮のスクリーンにリュミエール工場が現れるのを、私たちは見ました。門が開かれて、労働者の群れが退出し、彼らは身振りをしたり、笑いながら、レストランや自宅へ向かったのです。⁽¹⁵⁾

オセジェやギイが証言するとおり、『工場の出口』が史上初の公開映画であることは確実である。ただし、この作品をめぐる微妙で複雑な問題が存在し、ながらく映画史家を悩ませてきた。現存する作品『工場の出口』では労働者が夏の服装をしているところから、サドゥールはこれを1895年夏に撮影されたものとする。彼の推測によれば、国立工業奨励協会で上映された『工場の出口』は、同年3月22日より以前に撮影された別の作品である。前述したオセジェの報告のように、この作品に関する証言のいくつかは、車や馬、または馬車で退出する人物を画面に認めているが、そのような光景が現存の『工場の出口』には含まれていない。さらにまた、1946年にルイ・リュミエールが『工場の出口』を1894年夏の撮影とあらためて申し立てたため、製作の時期をめぐる謎は一層深まった。この問題についてサドゥールは1894年夏と主張される作品を幻の『工場の出口』No.0、1895年3月以前に撮影され、いまは失われた作品を『工場の出口』No.1、おそらく1895年夏の製作であり、現在も保存されている作品を『工場の出口』No.2と分類した。ただし、こうしたサドゥールの解釈にも反論が絶えない。⁽¹⁶⁾

III フランス写真協会大会における公開

国立工業奨励協会での公開に続いて、シネマトグラフは6月10日および12日フランス写真協会の大会において披露された。映画の創出にも重要な役割を果たすこの団体は、奇しくもリュミエール一家の地元リヨンで1895年度の大会を開催した。⁽¹⁷⁾会長ジャンサンはムードンの天文学物理観測所を創設した国際的な天文学者である。彼は12の感光板を備えた写真ピストルを考案し、1874年の日蝕やモンブラン山頂での天空を撮影した。ジャンサンの写真ピストルは生理学者マレをおおいに啓発し、映画創出の基礎とされるクロノフォトグラフの発明へと導く。⁽¹⁸⁾物理学の泰斗マスカールとともに、この独創的な天文学者ジャンサンからも、リュミエール一家は熱烈な讃辞を受ける。リヨンでの大会を総括する閉会挨拶で、ジャンサンはシネマトグラフの意義を下記のように評価した。

この大会における大いなる出来事はふたりのリュミエール氏によってなされた活動写真の成果であります。

このような方途としてはエディソン氏およびマイブリッジ氏の興味ある成果がなによりも知られています。しかし、これらの発明家が創造した動く画像を、同時にはひとりの人間しか見れません。リュミエールの場合には招かれたすべての会衆が、驚嘆すべき幻影を眺めたのです。

こうした写真の新たな部門は、金星による日蝕を撮影するため、1874年に発明された写真ピストルを出発点としています。1876年その器械を写真協会に提示するにあた

り、発明者である私自身 [ジャンセン] が、つぎのように強調しました。変転する現象の諸局面を研究するため、またとりわけ進行や疾走や飛翔を研究するため、これをさまざまに応用できる、と。

ご存じのとおり、現に科学アカデミー名誉院長、フランス写真協会名誉会長である方 [マレ] が、そのような器械の原理を把握し、完璧なものに造り変えることに成功しました。

しかし、写真ピストルやその副産物を用いて、一連の基本的な諸局面に運動を分解できるとしても、動く光景を写真により映像化する方途は、一層目覚ましい前進を約束しています。

動く光景のあらゆる継続的諸局面を、写真によって凝固させたあと必要とされるのは、それらを迅速かつ正確に総合し、あたかも自然が提示するかのよう、光景そのものの映像を私たちの眼に差し出すことであります。

会員諸君/リュミエール氏のお陰でこのような写真、活動写真によって大いなる前進が為し遂げられました。運動を分解する写真と区別するため、これを活動写真と命名するよう、ここで私は提案します。⁽¹⁹⁾

リヨンでは証券取引所講堂が大会会場に当てられ、まず6月10日そこにおいて『工場の出口』など8作品が上映される。『フランス写真協会会報』第16号(1985年)はこの日の映写についてかなり詳しい論評を掲載した。この論評はシネマトグラフの意義と特色を明らかにするとともに、作品の内容をも簡潔に語っている。⁽²⁰⁾

ついでリュミエール家の人々が分解写真のいくつかを披露した。それは彼らみずからが発明し、〈シネマトグラフ〉と名づけた装置によって作成されたものである。縮小した形で〈ひとりで〉しか眺められぬエディソンの装置にすら私たちは感嘆するが、リュミエール家の器械ではスクリーンに実物で映写できるので、動く事物を〈多数の〉会衆が同時に見ることができる。

これによって大いなる進歩が達成され、今後の課題は色彩を添加し、音声と結合することだけとなった。こうした課題が為し遂げられれば、生の姿を精密かつありのままに表現できる。

以下のような主題が会衆の眼前につきつぎと出現し、写し出される各々の場面を熱狂的な拍手が包んだ。①『工場の出口』では沢山の男や女や子どもが、昼食を取るため急いでいる。徒歩で行く者もあり、自転車に乗る者もある。労働者たちが消えると、雇用者も食事をするため、馬車で出ていく。これこそ事実から汲み取られた熱き生である。なお、この映写はアンコールの榮譽を受けた。②『リヨンの証券取引所』では歩行者や馬車や電車が活発に往来している。③『曲芸の稽古』では新人が馬を相手に登ったり、坐ったり、降りる練習をする。④『鍛冶屋』は鉄を鍛えている。⑤『嬰兒』が大きな鉢にいる赤い金魚を掴もうとし、取り逃して両親に驚きの表情を示す。⑥『火災』では懸命になった消防夫が、強力な水圧を利用して火に打ち勝つ。⑦『園丁』が庭で現代風にホースで撤水している。悪戯者がそのホースを踏みつけ、園丁の作業を邪魔する。⑧『お菓子を食べる嬰兒』では顔面のあらゆる動きや変化が美事に再現されている。⁽²¹⁾

さらに翌々12日フランス写真協会はベルクール広場のペリエ・エ・ミエ亭において大

会祝宴を催し、これにもシネマトグラフの映写を付加した。この日リュミエール兄弟は前述の作品に加えて、48時間前に撮影したふたつを披露し、会衆を一層驚嘆させる。すなわち、第一の作品『大会小旅行参加者のソーヌ河岸ヌヴィル到着』では前日に行われた写真協会小旅行が撮影され、ジャンセンに率いられた多数の会員が、船から降りて、河岸を歩んでいる。また、第二の作『ジャンセン氏とラグランジュ氏の論議』を映写した際には、フランス写真協会会長とリヨン写真同好会会長の姿が再現され、これに音声を加味するため、スクリーンの陰でラグランジュが撮影の時点と同じように論議を始めた。⁽²²⁾

この大会におけるシネマトグラフの披露は当地の大新聞『エクスプレ・ド・リヨン』および『プログレ・ド・リヨン』に報じられた。半年後グラン・カフェでなされた一般公開はパリでは小新聞の『ラディカル』と『ラ・ポスト』で扱われたのみであり、リヨンにおけるジャーナリズムの反応はむしろ機敏であったと感じられる。⁽²³⁾『プログレ・ド・リヨン』には大会最終日の模様がつぎのように描かれている。

祝宴が終って、会食者がコーヒーを摂り、急いで宴会場を片付ける間に、隣接の部屋には素早く椅子が用意され、より優雅な方々でたちまち一杯になった。あまり沢山なので広大なモエ広間にも入り切れないほどである。[中略]

最後にこの夕の呼びもの、リュミエール氏のシネマトグラフが披露され、大いなる成功を収めた。同氏はアメリカ人ではないので、神エディソンを凌駕しても支障はない。[中略]

科学アカデミーのジャンサン氏がヌヴィル県会議員ラグランジュ氏と歓談しているのは、なんと楽しい光景であろう。身振りがきわめて忠実に再現されているので、スクリーンの背後に両氏が立っている、共謀して両氏が魔術幻灯を楽しんでいる、と思ひ込むほどである。だが、実際に両氏は部屋の真中にいる。そして、24時間前に行なったみずからの会話と動作がリュミエール氏によって再現されるのを眺めている。

絶大な成功であり、人々は劇場でするように、オーギュスト・リュミエール、ルイ・リュミエールの両氏を呼び戻した。ふたりは多少躊躇したあと、ふたたび姿を見せ、ブラボーという歓呼に3度包まれた。会衆は午前零時に解散したが、それでもまだ続けて欲しいと苦情を述べた。⁽²⁴⁾

IV パリ大学、ラ・シオタ、ブリュッセルなどにおける公開

グラン・カフェにおける一般公開までにシネマトグラフはすくなくともさらに4度披露されている。まず1895年7月11日権威ある学術雑誌『純粹科学・応用科学一般評論』は、リュミエール兄弟の映写会を催した。これに参加した雑誌関係者150名を代表して編集主幹オリヴィエが新作『リヨン・ベルクール広場』などの作品を激賞し、また技術専門家ゲーが同誌7月31日号においてシネマトグラフの性能と上映された8作品について論じた。エディソンのキネストコープと比較しつつ、ゲーはリュミエール兄弟をつぎのように評する。⁽²⁵⁾

シネマトグラフは〔キネストコープのような〕不便を感じさせない。1秒間に15個のプリントを送り出し、それらをスクリーンに投射するので、この器械は1分間にさまざまな動く光景を〈すべての会衆〉に提示しうる。

かつまた、動く事物をどんな奥行でも捕捉できるため、街路や公共の広場の動きを

事実ありのままに表現することが可能となる。

この器械に私たちの手が触れるのを許し、私たちが求めるあらゆる説明をして頂いた好意を、心からリュミエール氏に感謝したい。⁽²⁶⁾

ついでパリ大学理学部も同年11月16日ソルボンヌ大講堂でシネマトグラフの映写を行った。これには数多くの学者や名士が列席し、上映に先立ってダルブー、リップマンなど4人の専門家が講演を行った。これらはいずれも学界の指導的な人物であり、解析学の権威ダルブーはパリ大学理学部長を勤め、実験物理学の教授リップマンは前述のとおり1891年にカラー写真を成就している。⁽²⁷⁾

さらに地中海沿岸のラ・シオタでも9月22日にシネマトグラフが披露された。同月2月4日付『ル・プチ・マルセイユーズ』の報道によれば、その日はアントワヌ・リュミエールの瀟洒な別荘に150人が招待され、『工場の出口』、『火災』、『ラ・シオタの海水浴場』等の作品に驚嘆した。⁽²⁸⁾

これらの催しのなかで1895年11月10日ブリュッセルでの集会は、フランス国外におけるシネマトグラフ初公開としてとくに注目される。この映写会はベルギー写真協会の主催によって工業専門学校構内で行われ、130人あまりの参加者を得た。ついで翌々日にはブリュッセル公園の典雅なウオー会堂で『工場の出口』などが上映された。シネマトグラフが巻き起した興奮をベルギーの新聞、1895年11月13日付『ラ・クロニク』はつぎのように伝えている。⁽²⁹⁾

深い暗闇に包まれて、会衆は熱心に持ち続けた。突然超自然的とも感じられる光の奔流のなかに、人間の姿がいくつか現れて、動き、生活し、行動し、過去の寸時をふたたび生きた。[中略] 私たちは感動に駆られ、諸手を挙げた。器械が止まって、光が消え、私たちは神秘的な暗闇のなかでみづからの激しい脈動や茫然とする己れを意識したのである。⁽³⁰⁾

こうしてリュミエール一家が創出したシネマトグラフは、1895年12月28日からの一般公開が爆発的な人気を巻き起す以前に、国外をも含めて数回披露され、学術研究者や写真専門家の間できわめて高い評価を勝ち得ていた。キャブシーヌ大通り・グラン・カフェにおける興行が歴史的な快挙となる基盤は、なによりもこれによって固められたと筆者は考える。

(平成3年9月17日受理)

【 註 】

本稿の主題に関連する文献のうち、筆者が頻繁に参照した書物は下記の略号で示される。

BSEI : *Bulletin de la Société d'encouragement pour l'industrie nationale.*

CI : Bernard CHARDERE, *Les Lumières, Payot Lausanne*, 1985.

Ch : G.-Michel COISSAC, *Histoire du cinéma*, Paris, Cinéopse et Gauthier-Villars, 1925.

Shg : Georges SADOUL, *Histoire générale du cinéma*, Paris, Denoël, 1973. 6 volumes.

Slm : Georges SADOUL, *Lumière et Méliès*, Paris, Lherminier, 1985.

オエタ : 岡田晋著『映画の誕生物語』美術出版社、1980年。

- 1) 幻燈、動画、分解写真など映画の前史、および映画創出へのさまざまな試行については、サドゥールの浩瀚な著作『映画全史』が詳細かつ包括的である。Shg. tome I。また、岡田晋による『映画の誕生物語』はフランスでの実地検証に裏づけられ、示唆と魅力に富んでいる。なお、ソヴァージュの近著『リュ

ミエール問題—神話から歴史へ』では映画の創始者をめぐる錯綜した事実が克明に調査されている。
Léo SAUVAGE, *L’Affaire Lumière, du mythe à l’histoire*, Paris, Lherminier, 1985.

- 2) *Slm*, pp. 10-11. オエタ, pp. 23-26.
- 3) *Slm*, pp. 9-13, 18. オエタ, pp. 24-26, 31-32.
- 4) Entretiens avec Louis Lumière. dans *Slm*, pp. 91.
- 5) *Slm*, pp. 12-13. Ch, pp. 177-182.
シネマトグラフ(cinématographe)はギリシア語のkinema (動く)とgraphein (記録する)に語源を持つ。この名称はエディソンによって発明された器械のひとつ、キネトグラフ(kinetograph)に酷似しており、父アントワヌはドミートル(domitor)と名づけるよう当初提案した。*Slm*, p. 14.
- 6) Extrait du premier brevet du futur Cinématographe, 13 février 1895. dans *Slm*, pp. 16, 97-98.
- 7) *Slm*, pp. 19-20. *BSEI*, No.112, tome X, 4e série (avril 1895), pp. 3-11.
なお、マスカールなど科学者の経歴と業績を知るにはつぎの『科学者伝記辞典』が便利である。*Dictionary of Scientific Biography*, New York, Charles Scribner’s sons, volume IX, pp. 154-156.
- 8) *Slm*, p. 19. *Cl*, pp. 71-72.
- 9) *Ch*, p. 183. *Slm*, p. 19.
なお、シネマトグラフを着想したあと、リュミエール一家はその製造を機械技師モワッソンに依頼し、リヨンで実験的な撮影・映写を幾度か試みていた。『工場の出口』に先立って、勿論多くの試作がなされたであろう。フランス写真協会の運営委員長ダバンスはカンヌへの旅路でリヨンに立ち寄り、3月22日以前にシネマトグラフの試写から感銘を受けたという。*Slm*, p. 19.
- 10) *BSEI*, No.112, tome X, 4e série (avril 1895), pp. 412-413.
- 11) *BSEI*, No.115, tome X, 4e série (juillet 1895), pp. 770-786.
- 12) *Cl*, pp. 124-137. ヘルムート・ゲルンシムほか著、伊藤逸平著『世界の写真史』美術出版社、1977年。pp. 55-56. シャープ編著、小沢秀匡訳『写真の歴史—不滅のバイオエアたち—』PARCO、1976年。pp. 179-190.
- 13) *Cl*, pp. 71-72.
- 14) *Slm*, p. 20. オエタ, pp. 163-164.
- 15) Alice GUY, *Autographie d’une pionnière du cinéma* (1873-1968), Paris, Denoël-Gonthier, 1976. pp. 59-60.
- 16) *Slm*, pp. 22-23. なお、この問題についてはさきに挙げたソヴァージュ著『リュミエール問題—神話から歴史へ』を参照されたい。
- 17) *Slm*, pp. 21, 29, *Ch*, p. 183.
- 18) *Dictionary of Scientific Biography*, volume VII, pp. 73-78. *Shg*, tome I, pp. 77-79.
オエタ, pp. 79-80.
なお、写真ピストルの発明および日本でなされた日蝕撮影についてジャンサンは、つぎのような報告書を科学アカデミーに提出した。Pierre-Jules-César JANSEN, *Note sur le principe d’un nouveau revolver photographique*, Paris, Gautier-Villars, (s. d.). pp. 1-3.
JANSEEN, *Présentation de quelques spécimens de photographies solaires obtenues avec un appareil construit pour la mission du Japon*, Paris, Gautier-Villars, (s. d.). pp. 1-3.
- 19) JANSEEN, Discours prononcé à Lyon le 12 juin 1895 pour la clôture du Congrès des sociétés françaises de photographie. dans *Slm*, p. 101.
- 20) *Ch*, p. 183. *Slm*, pp. 29, 123. *Sl*, pp. 72-73.
- 21) *Bulletin de la Société française de photographie*, No.16(1895). dans *Ch*, pp. 73-74.
- 22) *Slm*, pp. 29, 123. *Ch*, p. 183.
- 23) René JEANNE et Charles FORD, *Le Cinéma et la presse 1895-1960*, Paris, Armand Colin, 1961. pp. 17-18. ただし、この書物のなかでリヨンの大新聞に関する評価の程度と引用の仕方に、筆者は多少疑問を持つ。
- 24) *Le Progrès de Lyon*, 13 juin 1895. dans *Cl*, pp. 75-76.

25) *Ch*, pp. 183-184. *Cl*, pp. 76-80. *Slm*, pp. 29-30, 120.

26) *La Revue générale des sciences pures et appliquées*, 30 juillet 1896. dans *Cl*, p. 78.

27) *Ch*. p. 184. *Cl*, p. 83. *Slm*, p. 120.

28) *Cl*, pp. 80-82.

29) *Ch*. p. 184. *Slm*, pp. 104-105.

この時点におけるベルギーのシネマトグラフ受容についてはつぎの論文が詳細である。

Georges ONCKLINK, Les Débuts du Cinématographe Lumière à Bruxelles après les journaux du temps (Novembre 1895-Février 1897). dans *La Revue d'histoire moderne et contemporaine*, juillet-septembre 1955. pp. 219-222.

30) *La Chronique*, 13 novembre 1895. cité dans ONCKLINK, *op. cit.*, p. 221.